日蓮大聖人御書全集

上野殿御返事（うえのどのごへんじ）

（法華経難信の事（ほけきょうなんしんのこと））

新版
1922
〜
1923

上野殿御返事（法華経難信の事）

弘安4年（'81）3月18日　60歳　南条時光

蹲鴟一俵、給び了わんぬ。またこうぬしのもとに候御乳塩一疋、ならびに口付き一人候。

さては故五郎殿のことは、そのなげきふりずとおもえども、御げんざんははるかなるようにこそおぼえ候え。

なおもなおも法華経をあだむことはたえつとも見え候わねば、これよりのちもいかなることか候わんずらめども、いままでこらえさせ給えること、まことしからず候。

仏説いてのたまわく「火に入ってやけぬ者はありとも、大水に入ってぬれぬものはありとも、大山は空へとぶとも、大海は天へあがるとも、末代悪世に入れば、須臾の間も法華経は信じがたきことにて候ぞ」。

徽宗皇帝は漢土の主。蒙古国にからめとられさせ給いぬ。隠岐法皇は日本国のあるじ。右京権大夫殿にせめられさせ給いて、島にてはてさせ給いぬ。

法華経のゆえにてだにもあるならば、即身に仏にもなら せ給いなん。わずかのことには身をやぶり命をすつれども、

法華経(ほけきょう)の御(おん)ゆえに怪(あや)しのとがにあたらんとおもう人(ひと)は候(そうら)わぬぞ。身(み)にて心(こころ)みさせ給(たま)い候(そうら)いぬらん。とうとし、尊(とうとし)。恐々謹言(きょうきょうきんげん)。

弘安四年三月十八日(こうあんよねんさんがつじゅうはちにち)　　日蓮(にちれん)　花押(かおう)

上野殿御返事(うえのどのごへんじ)